

日本近世文学会春季大会のご案内

会員の皆様には時下ますますご清祥のことと存じます。

さて、二〇二一年度春季大会を左記の通り開催いたしますので、ご案内申し上げます。

二〇二一年五月十二日

日本近世文学会春季大会会場校代表 津田 眞弓
日本近世文学会事務局代表 柳沢 昌紀

大会プログラム

【日本近世文学会事務局】
中京大学文学部 柳沢昌紀研究室

【会場】オンライン会場

〒466-0825 名古屋市昭和区八事本町一〇一―二

【行事】 第一日 六月十二日(土)

電話 〇五二―八三五―七三一八(研究室直通)

委員会 (一・一〇〇〇～二・二二〇)

メールアドレス info@kinseibungakukai.com

会場開室 (一三・〇〇)

開会時間 (一三・三〇)

シンポジウム (一三・四〇～一五・四〇)

「デジタル時代の和本リテラシー——古典文学研究と教育の未来——」

パネリスト

慶應義塾大学附属研究所

佐々木孝浩

ケンブリッジ大学

ラウラ・モレットイ

国文学研究資料館

海野圭介

天理大学附属図書館

宮川真弥

同志社大学

山田和人

明星大学

勝又和基

ディスカッサント

慶應義塾大学

津田眞弓

日本近世文学会賞授賞式・総会 (一五・五〇～一七・一〇)

懇親会 (一七・三〇～一八・三〇)

第二日 六月十三日(日)

会場開室 (一〇・〇〇)

研究発表会 午前の部 (一〇・三〇～一一・五〇)

1 勸化の素材としての漢籍受容——〈倩女離魂〉を例として——

日本学術振興会特別研究員(PD)

木村迪子

2 『西鶴諸国はなし』巻三の六「八畳敷の蓮の葉」試論

安田女子大学

島田大助

昼休み (一一・五〇～一二・三〇)

編集委員会 (一二・〇〇～一二・三〇)

研究発表会 午後の部 (一二・三〇～一六・二〇)

3 市川湫村と彰義隊の墓を詠った詩——明治期の大沼枕山一派の詩風について——

慶應義塾大学

合山林太郎

4 長嘯子関連の狂歌資料——石水博物館蔵「狂歌書留」をめぐる——

中部大学

岡本聡

5 書物としての芝居——小津桂窓書簡中の演劇記事を手がかりに——

奈良女子大学(非)

早川由美

6 「小牧長久手合戦図屏風」はどのように描かれたか——典拠となった合戦記の発見——

愛知工業大学

松浦由起

閉会 (一六・二〇)

オンライン図書展示

シンポジウム要旨

デジタル時代の和本リテラシー——古典文学研究と教育の未来——

慶應義塾大学 津田 眞弓(司会)

コロナ禍は社会を大きく容容させました。我々はオンラインでのコミュニケーションやデジタル化という大きな渦に翻弄されています。そのなかで、遠くにいる研究者とオンラインで集うということは、数少ない喜びでありました。昨年秋のシンポジウムは「つながる喜び——江戸のリモート・コミュニケーション」でしたが、それを受けて今回は、我々が体験したオンラインでの「つながる喜び」の先を考える機会にしたいと思います。国や地域を越えてオンラインでつながって、デジタル化が進んでいく、その先にある古典文学研究や教育の課題について、様々な取り組みから見えてくる課題や今後に向けた知見を共有します。

国際化、デジタル化、研究のあり方、和本リテラシー教育。本日我々が直面する喫緊の課題として取り上げるものは、二〇一九年度に本学会員アンケートを踏まえて絞られた七十周年記念のテーマ候補といくつも重なります。そして皆様がお答え下さった時より事態は大きく動いています。

このシンポジウムでは、日本近世文学会が長らく普及を行ってきた「和本リテラシー」に関わる事柄、そして古籍から情報を得て翻刻をするという、この本学会員にとって研究の基礎ともいえるべき行為に焦点を当て、デジタル時代にどう研鑽し、どう活用するのか——そして我々が得たものを未来にどう残していくのかを考えます。我々がつきあうことになるデジタルのシステムは決して魔法ではありません。出来ること、出来ないことをきちんと理解することで、おのずから、我々がなすべきこと、そして我々の仕事の意義が見えてくるのではないのでしょうか。

パネリスト

書誌学の国際的なeラーニングとワークショップを通じて

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫 佐々木 孝 浩

海外での和本調査を通して、和本の知識を得たいと希望する日本研究関係者が多いことを知り、欧米を中心に和本ワークショップを行ってきた。折しもオンラインでの大学授業配信が世界の流行となり、勤務先でも行うことになったので、経験を活かしたコースを公開してきた。新型コロナの流行は、その受講をしやすくしただけでなく、より高度なオンラインセミナーの開催を促進させている。このような現状を簡単に紹介するとともに、こうした傾向がもたらす未来について私見を述べてみたい。

AI時代における和本リテラシー——海外の研究者を育て続ける未来——

ケンブリッジ大学 ラウラ・モレッティ

未翻刻の資料を自分で解読するのは、中野三敏氏が述べる「江戸人の眼を持つ」ことに繋がり、斬新な知見を生み出す元となる。海外の研究者にとっても、近年、この能力を身につける重要性が認識されつつある。ケンブリッジ大学で毎年開催されるサマー・スクールは、八年間にわたって二〇〇人の若手の研究者を育ててきた。本発表では、原文を速やかに読み、忠実な翻刻を作成するためのAIの役割を検討し、外国人の和本リテラシー教育にどのような形で利用すべきか、その未来像を論じる。

大規模画像蓄積からデータ駆動型の研究・教育へ

国文学研究資料館 海野 圭介

国文学研究資料館の「データ駆動による課題解決型人文学の創成」は文部科学省科学技術・学術審議会の、学術研究の基本構想「ロードマップ2020」に掲載された十五計画の一つとして策定された。しかしながら、人文学・社会学分野からはわずかに一件のみの策定であり、人文学の存在感はほとんど無きにひとしい。私どもには何が求められているのか？ また、何ができるのか？ 立案過程で議論を重ねてきた、異分野融合、AIとの共存、国際化の推進等々の課題について、改めて本学会に示したい。

紙面と画面 —— 「翻刻の未来」続貂 ——

天理大学附属天理図書館 宮川 真弥

我々が書籍や雑誌において行っている翻刻は、古籍籍というモノから情報を抽出し、紙というモノにその情報を定着させる営為である。一方、組版や印刷を経ずに、それらの情報を電子テキストとして公開することもしばしば行われている。翻刻に関連する学術情報提供活動を分析した上で、紙面と電子テキストにおいて翻刻の志向するところにとどのような差異があり、それぞれにとつて望ましい作業のあり方はどのようなものなのかを検討し、具体的な「翻刻の未来」の提示を試みたい。

古典教育に学会は何ができるのか —— 出前授業から見えてきたもの ——

同志社大学 山田 和人

新学習指導要領には「伝統的な言語文化」の事項が設けられ、既に小学校の教科書にくずし字学習が導入されている。学会が推進してきた和本リテラシーが文科省の教育指針の中に結果として盛り込まれた形である。そこで、従来実施してきた学会の出前授業を、実施形態、実施体制、授業形態、使用教材等に注目して整理し、その上で、あつてほしい、あるいはあるべき出前授業のモデルを検討し、和本リテラシー教育（くずし字や和本を用いた古典教育）における教材のあり方について考えたい。

【ご案内】

●シンポジウム ウェブサイト

http://www.kinseibungakukai.com/2021haru_symposium/

発表・討議に関わる種々の情報を多数載せております。
あわせてご利用ください。



●オンライン図書展示

慶應義塾ミュージアム・コモンズのグラランド・オープン記念企画

「交景・クロス・スケープ」デジタル展示

詳細は会員用の春季大会特設ページをご覧ください。

勸化の素材としての漢籍受容 —— 〈倩女離魂〉を例として ——

日本学術振興会特別研究員 (P D) 木村 迪子

〈倩女離魂〉は禅籍『無門関』第三五則を介して日本に伝来し、またそのストーリーは『鰲頭無門関』（寛文六刊）の頭書に記された『剪灯新話句解』のそれが一般に広まったとされる。

一方で、貞享から正徳期にかけて板行された浄土宗・真宗僧侶らによる勸化本に〈倩女離魂〉譚がしばしば用いられていたことは知られていない。早い例としては真宗仏光寺派の玄貞による『浄土宗要弁対鈔』（貞享二刊）登載話を指摘できるが、当該章段は『五灯会元』の一節を踏襲する可能性が高い。

勸化本作家らは〈倩女離魂〉を禅の公案として解釈しなかった。例えば『真宗勸化行状鈔』（元禄八刊）では著者・了信は二身に分かれてまで恋人を追いかける倩娘の想いを弥陀への帰依に重ね合わせて礼讃する。勸化本の世界においては明らかに〈倩女離魂〉は禅の公案とは別に解釈されてきたのである。

異なる解釈は何故生じたのか。発表者はその一因として浄土宗白旗派の源誉随流による『本願直談略抄』（正保四刊）巻第六ノ第三十一願「倩女離魂之事」を指摘する。本書においては従来知られてきた〈倩女離魂〉譚とは全く異なるストーリー展開を見せる。つまり〈倩女離魂〉は直談の一素材として既に宗学に活用されていたのであり、その前提があったからこそ、近世期に『剪灯新話句解』などを踏まえて刷新された〈倩女離魂〉が勸化本独自の解釈を以て広く利用されるに至ったと結論づけられるのだ。

『西鶴諸国はなし』巻三の六「八畳敷の蓮の葉」試論

—— 『太平記』『信長公記』との関係から ——

安田女子大学 島田 大助

井原西鶴作、貞享二年刊『西鶴諸国はなし』巻三の六「八畳敷の蓮の葉」（以下本話）は、吉野山に庵を結ぶ道心者が、訪ねて来た人々に語る、常識を越えた存在についての話である。

これまで、本話に影響を与えたものとして、蛇（竜）の昇天については『奇異雑談集』『和漢三才図会』、二間四方の蓮の葉については「題二太乙真人蓮葉図一」（『古文真宝』）、策彦和尚と二間四方の蓮の葉については「謙斎老師帰日城図」、吉野と策彦和尚については夢窓国師の進言（『太平記』巻二十四「天竜寺建立事」）、信長の笑いと策彦和尚の涙については拈華微笑（『太平記』巻二十四「依二山門嗽訴一公郷僉議事」）などが指摘されている。

本発表では、これらに加え、西鶴が本話作成に利用したと思われるものを二点指摘したい。一点目は、『太平記』巻二十四「依二山門嗽訴一公郷僉議事」に記される宗論（舍利弗と六師外道、摩騰法師と道士の逸話）との関係である。二点目は、『信長公記』などに記される安土宗論との関係である。この二点を踏まえて本話を読むと、『太平記』『信長公記』などに描かれる宗論を利用した話であり、話の随所に法華経が組み込まれていることが明らかになる。

なお、本話との関連で、狩野派で粉本として伝えられていた『戯画図巻』（別称あり）についても言及する。

市川湫村と彰義隊の墓を詠った詩——明治期の大沼枕山一派の詩風について——

慶應義塾大学 合山林 太郎

幕末期以降の江戸・東京漢詩壇の中心人物であった大沼枕山（文化一五年～明治二四年）には多数の弟子がおり、彼らの足跡から、この時期の詩のあり方を総合的に理解することができる。本発表では、枕山門下の一人市川湫村（天保八年～明治二四年）の詩の特徴を分析し、漢詩史の中に定位する。

湫村の詩で評価を得たものには、時事詠が多い。たとえば、長編古詩「東台春興歌」（『湫村詩鈔』巻下）は、今日も上野に残る彰義隊の墓を詠ったものであるが、湫村は、人々が花見にばかり興じて墓を顧みないことや、官軍の兵士が墓前で放尿していることなどを批判し、人心の荒廃を嘆いている。これは、新政府の官僚らの放蕩を諷刺した枕山の『東京詞』などと軌を一にするものと言えよう。

漢文雑誌『明治詩文』五集（明治一〇年四月）には、この「東台春興歌」が掲載された版と、それが削除され、別の詩が掲載された版とが確認できる。政府による統制を意識し、版元が自主的に彫りかえたなどの事情が推測され、湫村の詩が一定の反応を引き起こしていたことが分かる。

その一方で、湫村の詩は、過度に平俗な語を含むとして、他の流派の詩人から攻撃された。やや奇矯な表現を用いることは晩年の枕山の詩の特徴でもあったが、枕山ほど該博な知識を持たない湫村の場合、その措辞は問題を孕むものとなった。枕山からの継承と変質の両方の要素が、湫村の詩には確認できる。

長嘯子関連の狂歌資料——石水博物館蔵「狂歌書留」をめぐる——

中部大学 岡本 聡

石水博物館に「狂歌雜纂」（一九八―二六）と仮題をつけた近世前期写と考えられる狂歌資料が存在する。本資料はA部の「狂歌譚」、B部の長嘯子関連の和歌資料、C部の『雄長老狂歌集』（前半部欠落）の三部から構成されている。Aの「狂歌譚」の部分には、『醒睡笑』『新撰狂歌集』『古今夷曲集』『寒川入道筆記』などの重出部分が見られ、その異同を検討すると、この本資料から新しく窺える知見も見られ、新出の狂歌なども含んでいる。Cの『雄長老狂歌集』は錯綜が存在した為か途中からしか存在しないが、大谷俊太氏が紹介した近衛信尋自筆本の記述に近いものの、一部添削と思われる箇所なども確認出来る事が指摘出来る。

本資料は異文や、添削、新出資料を含む雜纂の形で資料が存在する事から類推すると、同時代の雄長老や長嘯子に近い人物が集めたものと考えられる。A部の「狂歌譚」は二カ所に長嘯子に関わる狂歌が収められ、C部の『雄長老狂歌集』にはさまれる形で、B部には、長嘯子の和歌に関連する資料が収録されている。ここには、新出の長嘯子和歌が八首含まれ、本資料から作歌事情がより詳しくわかるものも含まれている。特に目を引くのが、以前拙稿で紹介した、長嘯子の「異風体」と考えられる歌が収められている事である。この歌についても添削と考えられるものが残った形で収録されている。今回の発表では、本資料について分析し、本資料がどのような性格の資料なのかを検討していきたい。

書物としての芝居 —— 小津桂窓書簡中の演劇記事を手がかりに ——

奈良女子大学(非) 早川 由美

菱岡憲司責任編集『石水博物館所蔵 小津桂窓書簡集』(和泉書院・二〇二二年二月刊)の中に、桂窓が川喜田遠里の質問に答えて書いた「近來実記を芝居に取組候書目」という紙片がある。嘉永年間と推定される書簡に付属したものであり、そこには寛政三年初演の『けいせい誰伏水』以下八作の芝居の名前が挙げられている。

そのうちの「誰伏水」「小倉色紙」「朝顔日記」の三作品について桂窓は「所持」していると述べ、希望があったら見せることも出来ると書いている。

逆に所持していない五作品の内訳は、表題を聞いたのみの「浜松井上家一件」と、某御隠居の事件の二つの芝居。一見はしたという寛政年間初演の『遠州中山染』『入間詞大名賢儀』『島廻戯聞書』の三作である。後ろの二作は再演されていないため、実際に舞台を見たのではなく本の形で「一見」したのだと推察される。

本発表では、まず桂窓がこれらの芝居を選んだ理由について考察する。書簡の話題や伊勢という土地柄から、松平定信に関するものや茶道関連などが挙げられたと考える。さらに、蔵書家である二人が、台帳や絵尽・番付、「実記」である実録類、関連する読本などの様々な形の書物としての芝居を読んだ可能性についても言及する予定である。

「小牧長久手合戦図屏風」はどのように描かれたか

—— 典拠となった合戦記の発見 ——

愛知工業大学 松浦 由起

「小牧長久手合戦図屏風」は、現在十本が伝わっているが、一番古いものは原本とされる犬山城白帝文庫(旧成瀬家蔵)のものであり、他本はその写しと言われている。六曲一双で、「長篠合戦図屏風」と対になっている。「長篠合戦図屏風」については『甲陽軍鑑』『甫庵信長記』など、屏風絵が描かれた典拠の合戦記が明らかにされているが、「長久手合戦図屏風」は、種々の合戦記を元に描かれたとされてきた。

岡本良一「賤ヶ岳と長久手——二つの合戦図屏風について」(『戦国合戦絵屏風集成 第二巻 賤ヶ岳合戦図 小牧長久手合戦図』中央公論社)では以下の十二本を紹介している。

『武家事記』 『三河物語』 『池田氏家譜集成』 『長久手合戦覚書』 『森家 先代実録』 『山中氏覚書』 『小牧御陣長湫御合戦記』 『長久手戦話』 『森家系譜』 『譜牒余録』 『水野勝成覚書』。なお同書図版の説明(内田九州男)では前記以外に、『松栄紀事』(『武徳大成記』) 『太閤記』 『安藤直次覚書』 『寛永諸家系図伝』も挙げられている。

本発表は、「小牧長久手合戦図屏風」の製作に当たって、絵の注文者、絵師、鑑賞者が共有したであろう物語の探索である。その結果たどりついた神谷存心著『小牧陣始末記』、探索の過程で知った絵解きの物語『或家蔵長久手合戦画面付紙之写』、およびそれらの原本『小牧陣長久手軍始末記』(内題『小牧陣長久手軍始末』名古屋市中心図書館河村文庫蔵)を紹介したい。